

島津家久・豊久父子と日向国

宮崎市教育委員会文化財課

新名 一仁

目次

はじめに

第一章 若き日の家久―その出自と人なり―

- (一) 島津家久の誕生
- (二) 家久の初陣
- (三) 家久の婚姻と領主取り立て
- (四) 大隅統一戦での軍功
- (五) 謀略家家久
- (六) 家久の上洛・伊勢参詣

第二章 佐土原領主・島津家久

- (一) 高城・耳川合戦
- (二) 家久の佐土原入城
- (三) 高城・耳川合戦後の九州情勢
- (四) 家久の人脈と策動
- (五) 龍造寺隆信との対決とその影響
- (六) 戸次道雪・高橋紹運の家久評

第三章 豊後進攻と謎の急死

- (一) 家久による日向山中調略活動
- (二) 豊後進攻計画と家久の暴走
- (三) 豊後進攻の明暗
- (四) 家久の降伏と謎の死

第四章 島津豊久の人となり

- (一) 島津豊久の誕生・幼少期
- (二) 豊久の初陣・元服
- (三) 豊久の家督継承と所領安堵

第五章 豊臣大名としての島津豊久―文禄・慶長の役から

- (一) 文禄の役
- (二) 慶長の役
- (三) 庄内の乱と関ヶ原の戦い

むすびにかえて―永吉島津家と本城家―

関ヶ原の戦い―

はじめに

ここ十年來の戦国ブームは、近年さらなる盛り上がりを見せ、日向国佐土原領主であった島津家久・豊久も、小説や漫画の主人公にもなり、人気を博している。地元でも、平成二十二年（二〇〇九）一〇月～十一月、宮崎市佐土原歴史資料館にて、特別展「島津家久・豊久父子と佐土原」を開催し、好評を博した（期間中入館者数二一・一八九人）。しかし、家久・豊久父子に関しては、良質な伝記や概説書が存在しないためか、いまだ地元宮崎市での知名度が高いとは言い難い現状がある。

本稿は、佐土原領主島津家久とその子豊久に関する基礎的事実を整理すると共に、巷間に流布する有名なエピソードではなく、近年の研究で明らかになった事実を中心に紹介していきたい。

第一章 若き日の家久―その出自と人となり―

（一）島津家久の誕生

島津家久は、戦国大名島津氏の祖とされる島津貴久（一五一四～七一）の四男であり、義久・義弘^三・歳久の異母弟にあたる。兄三人の母は、貴久の正室で入来院重聡の娘・雪窓夫人であるが、同夫人は天文一三年（一五四四）八月一日に没している^四。

家久が誕生したのは、それから三年後の天文一六年（一五四七）のことである。母は、「島津氏正統系図」^五によると、肥福岡某の娘「橋姫」とされる。なお、鹿児島県立図書館蔵「御家譜」によると、橋姫の母は本田丹波守親安の娘で、親安戦死後、母の実家である脇岡佐兵衛頼明によって養育され、貴久の側室となったという。

また、市来四郎編「石室秘稿」（国立国会図書館蔵）収録の「本城家家譜」（以下、「本城」と略す）中にみえる「家久母堂由緒覚」によると、橋姫（少納言）の母（本田丹波守親康室）は脇岡佐兵衛尉頼明の妹という^六。本田親康が戦死したのち、橋姫は脇岡頼明に預けられ、島津貴久の御側に召し使えるようになり、家久が誕生したという。

兄義久とは一四歳、義弘とは二歳、歳久とは一〇歳の差があり、母が側室だったためか、島津家一門のなかでも若干が家格差があったようである。後年、家久の縁戚となる島津氏老中上井覚兼の日記である『上井覚兼日記』では、義弘・歳久が、官位から「武庫様」・「金吾様」と表記されるのに対し、家久は「中書殿」と記されることが多い。

家久が誕生した天文一六年（一五四七）は、父貴久が祖父日新齋（忠良）とともに、ようやく薩摩半島を制圧したところであり、翌年から本格的に大隅国進出を図ろうとしていた時期にあたる^七。まさに、戦国大名島津家が大きな飛躍を迎えようとする前夜の誕生だったといえよう。

なお、その生誕地は、薩摩国伊作城（鹿児島県日置市吹上町中原）とされることが多いが、この頃既に父貴久は居城を伊集院一宇治城（同市伊集院町大田）に移しており^八、同城内であった可能性もあろう。

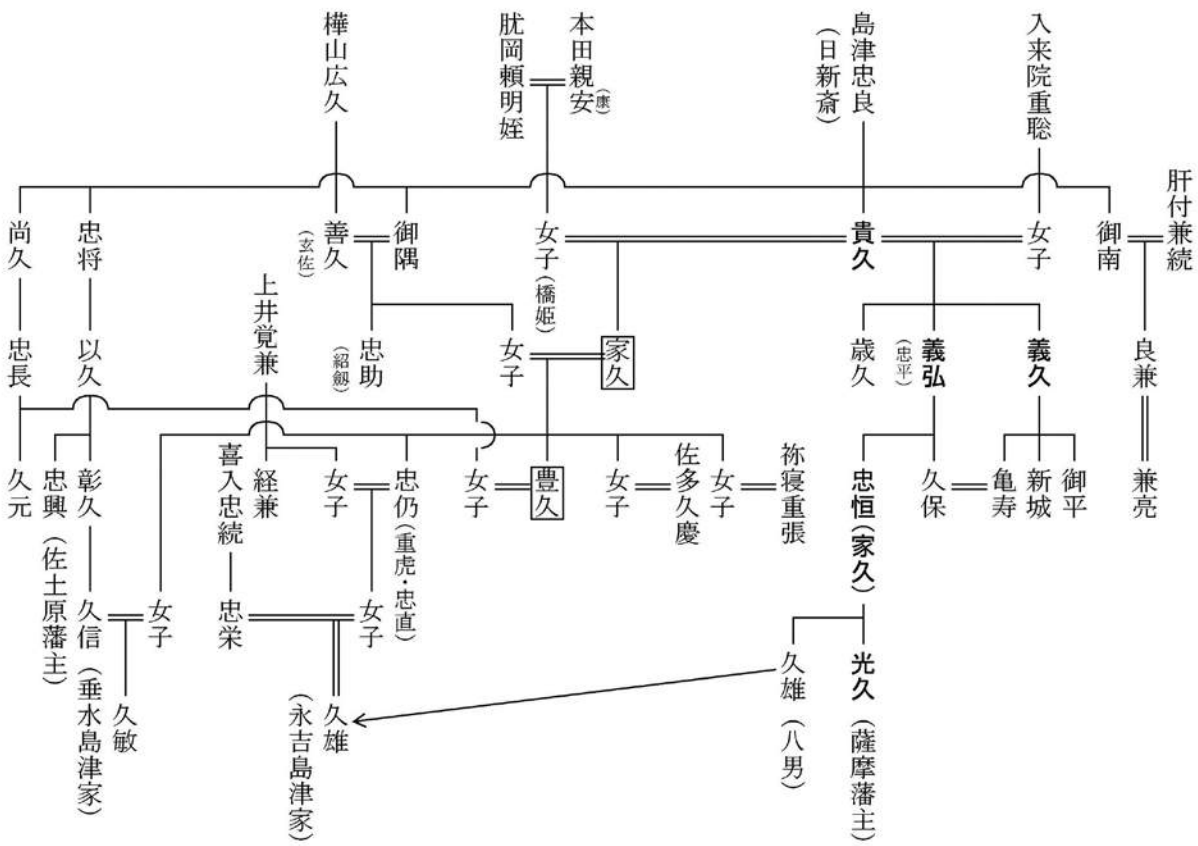
（二）家久の初陣

幼少期の家久がどのように育ったのかは不明であるが、初陣は、永祿四年（一五六一）六月、一五歳の時とされる（『本藩』）^九。

永祿元年（一五五八）三月、島津貴久の義兄にあたる肝付兼統勢と北郷忠相勢が、大隅国宮ヶ原の戦いで激突し、北郷氏は大敗を喫した。これに対し島津貴久は、永祿三年（一五六〇）三月頃、北郷

【戦国島津氏略系図】

※太字は「島津家正統系図」による家督継承者



氏の娘を室としていた二男義弘を飢肥城に入れ、豊州家支援の姿勢を鮮明にし、肝付氏との関係が急激に悪化していった。

同四年五月、肝付兼統勢は、島津方の廻城を攻略し、島津本宗家との直接抗争が勃発する。島津貴久は、大隅清水領主の弟忠将とともに出陣し、同年六月、この廻城を包囲する。この時家久は、「廻坂」^⑥での戦闘において敵将・工藤隠岐守を討ち取り、父貴久から褒美として脇差・鎧などを賜ったという。ただ、翌月の戦いで、島津忠将は肝付勢に大敗を喫して討死している。なお、この忠将の長男がのちに佐土原城主・初代佐土原藩主となる島津以久（征久、一五五〇～一六一〇）である。

(三) 家久の婚姻と領主取り立て

初陣からまもなく、家久は室を迎える。相手は島津家御一家で父貴久の義弟にあたる樺山善久（玄佐、一五二三～九五、大隅国小浜・堅利領主）の娘である（一五四八～一六二九、母は貴久の姉御隅）。永禄九年（一五六六）、この室との間に長女（のちの祢寝重張室）が生まれており（「本城」）、永禄八年以前のことであろう。家久は母の出自が低く、外戚の後ろ盾が無かったのだが、この婚姻により強力な後援者を得たのである。

樺山玄佐は、貴久の義兄というだけでなく、文武両道に通じた武将であった。天文二〇年（一五五一）には、大隅正八幡宮御神体造立のため上洛して、公家と和歌や連歌を楽しむなどの教養人であり、その後近衛前久から古今伝授を受けるほどの和歌の名手であった^⑦。

家久の父貴久は、和歌や連歌を嗜んでおり、弘治三年（一五五七）頃からしばしば連歌を興行している。家久はこの父の影響、そして舅となった玄佐の影響・手ほどきを受けたのか、永禄一〇年（一五六七）二月二五日には、二一歳の若さで父貴久とともに百韻

連歌に参加している⁽¹¹⁰⁾。後述のように、これから八年後の天正三年（一五七五）、家久は京・伊勢に旅立つが、京では当代きつての連歌師・里村紹巴の世話になっており、和歌で詠まれた名所旧跡をくまなく観光している⁽¹¹¹⁾。家久の歌が上手いかどうかは分からないが、かなりの和歌・連歌好きだったことは間違いない。

なお、家久が百韻連歌に参加する前年の永禄九年二月、父貴久は出家して「伯圍」と号し、島津本宗家家督を長男義久に譲っている⁽¹¹²⁾。

家督を譲った貴久は、義久・義弘とともに、永禄一〇年一二月、電撃的に大隅北端の有力国衆菱刈氏の本領菱刈院（鹿児島県伊佐市菱刈）に進攻する。菱刈隆秋はたまらず、隣接する相良義陽領の大臼城に逃れ、島津勢は居城太良城のほか七城を接収する。貴久は、これらの諸城に番衆を置き、大臼城包圍網を築き、同一二年九月まで足かけ三年に及ぶ籠城戦が続いた⁽¹¹³⁾。

家久は、舅樺山玄佐・忠知父子（忠助、家久義兄、一五四〇～一六〇九）とともに平和泉（同県伊佐市大口平出水）に在番している。さらに、永禄一二年正月一八日、飯野警備のため平和泉から横川（同県霧島市横川町）に移ったという（『本藩』）。なお、この横川入城の際、家久の母橋姫の兄・本田城之助久親が、「昵士七人」の一人として家久に付けられたという（『本城』）。

そして、同年五月六日には、肝付兼盛・新納忠元とともに相良・菱刈勢を誘き出すため計策をおこなう。家久は三〇〇の兵に蓑笠を着せて兵糧を運ぶ躰で「大口城ノ麓路」を通り、城兵を誘き出すことに成功。わざと撤退したところを、三方から敵兵を包圍し、首三三六を打ち取る軍功を挙げたという（『本藩』）。後年「釣り野伏」と呼ばれる戦法を見事に決めたのである。この勝利により、敵の勢いは無くなり、同年九月一〇日、大口城は開城する。さらに、永禄一三年正月、肥後相良氏との連携の道を断たれた、川内川流域の国

衆入来院重豊・東郷重尚は、島津氏に降服し、島津本宗家による薩摩統一が実現する⁽¹¹⁴⁾。

薩摩統一後の元亀元年（一五七〇）、島津義久は薩摩の所領配置をおこない、家久は、入来院氏の旧領である薩摩国隈之城（鹿児島県薩摩川内市隈之城町）の「地頭」となるとともに、同国串木野（同県いちき串木野市）の「領主」となり、串木野城を居城としている（『本城』）。なお、串木野入城まもない元亀元年六月一日、家久と樺山玄佐娘との間に、長男豊寿丸、のちの忠豊Ⅱ豊久が誕生している⁽¹¹⁵⁾。

ここで、戦国島津氏の「地頭」と「領主（一所持）」について説明しておこう。

戦国島津氏の支配地は、「島津本宗家の直轄地」と、「私領・一所在地」の二種に大別される。前者の場合、各地域の拠点となる城（外城）ごとに「地頭」がおかれ、地頭の下には小身の家臣が「衆中」として配置された。これを「地頭衆中制」と呼んでいる⁽¹¹⁶⁾。一方、後者は、島津氏一門・有力御一家・国衆の支配地のことであり、島津本宗家とは独立した排他的支配権をもっていた。一門では、当主義久の弟義弘の所領日向国真幸院（宮崎県えびの市）、歳久の薩摩国吉田（鹿児島市吉田地区）、義久の従兄弟にあたる島津忠長の薩摩国鹿籠（枕崎市）などがある。御一家・国衆では、喜人氏の薩摩国喜入（鹿児島市喜入地区）、北郷氏の日向国庄内（宮崎県都城市・三股町）などがある。家久の舅樺山玄佐も領主であり、大隅国小浜・堅利から、永禄一二年菱刈氏降伏後に、同国横川（鹿児島県霧島市横川町）に移されている。

家久は、隣接する隈之城の地頭と兼務ながら、二人の兄と同じく串木野の「私領主」に、ようやく抜擢されたのである。

(四) 大隅統一戦での軍功

薩摩一国を統一したとはいえ、大隅半島では、高山（鹿児島県肝付町）の肝付良兼・下大隅（同県垂水市）の伊地知重興・小祢寝（同県南大隅町）の祢寝重長が、日向の伊東義祐と同盟を結び、島津氏に対抗していた。

元龜二年（一五七一）、家久は向島地頭鎌田政年の援軍として、向島（現在の桜島）に在番していた。同年一月二〇日、伊東・肝付・祢寝・伊地知連合軍の兵船三〇〇艘が向島を襲撃しようとしたが、事前に察知した家久が迎撃する構えをみせたため鹿児島を襲撃している。さらに鹿児島から退去してきた兵船が再度向島を襲撃したところ、家久勢によって撃退されている（『本藩』）。

さらに、翌元龜三年九月には、兄歳久を大将とする軍勢が、向島から伊地知領の下大隅に進攻して、早崎城（垂水市牛根麓）を奪取する。家久は、この城の在番を務めていたが、元龜四年七月二四日、鹿児島島の諏訪神事のため在番衆が手薄になったところ、肝付勢三千の奇襲を受けている。家久は、わずかな手勢を率いて三尺余りの太刀^(二)で防戦し、腕などに八か所の手負いを受けながら、これを撃退したという（『本藩』）。

同年二月、祢寝重長は島津氏と単独講和を結び、大隅の反島津方同盟は崩壊。翌天正二年（一五七四）四月、伊地知重興・肝付兼亮は降服し、大隅国もようやく統一された^(三)。

薩摩・大隅両国統一により、しばらくの間島津領国には束の間の安寧が訪れ、降服した国衆旧領への地頭の配置、衆中の繰替（召移）などが行われていた。この間、家久の明と暗両面がうかがえるエピソードが生まれている。

(五) 謀略家家久

天正二年（一五七四）八月一日、謀叛の噂が流れた国衆入来院重豊は、降伏後も島津氏から安堵されていた、山田・天辰・田崎・寄田（いずれも薩摩川内市の川内川南岸）の四か名を返上する意向を示す^(四)。島津義久は、この四か名のうち、東シナ海に面した寄田（薩摩川内市寄田町）以外を収公することにし、残り三か名を誰に与えるか、老中らによる協議がおこなわれていた。

そんななか、八月一六日、家久から老中に対し、内々に要請があった（『覚兼日記』同日条）。その内容とは次のようなものである。

隈城西^(五)手名二十四町計御格護候、就其入乱候之間、隈城と六ヶ敷事度々出来候、突止二被思召候、然者此度入来院殿、山田・天辰・田崎上候由候、山田之事ハ三十町名にて候、雖然此前方分之時、半分者此方へ付候、其残卅町迄ハ有間敷候へ共、三十町二めされ、天辰・田崎彼十二町取合四十二町計にて候、是を隈城二御格護之所領二御くりかへ候へ

（意訳）自分は隈之城西手名に四〇町ほど所領を領有している。その所領は錯綜しているので、隈之城とたびたび相論がおきていて困っている。そこで、このたび入来院氏が山田・天辰・田崎を返上したと聞いた。山田は三〇町の名である。しかし、以前「方分」（詳細不明）の際、半分は自分の所領となった。その残りは、当然三〇町ではないはずだが、三〇町ということ（入来院氏から）召し上げられた。天辰・田崎は、合わせて一二町であり、合計で四二町となる。これを、隈之城に領有している所領と繰り替えて欲しい）

家久は、さらに付け加えて、次のようにも要請する。

入来院此度一ヶ条之儀 中書様も御申之事共候ツ、自然此所領御望にて、ケ様之事とも仰付候など々世間暖申候てハ、御迷惑たるへく候、爰も御老中御分別次第

（意訳）入来院氏の今回の一ヶ条（野心ありとの噂）は、家久も通報者のひとりであった。つまり、この所領が欲しくて、こうした噂を流し

たと世間から見られると、困ったものである。これも御老中にご判断
いただきたい。

今回、入来院氏が所領を返上するきつかけとなった謀叛の噂は、
家久が通報したものであり、その目的は、みずから都合の良い所
領を入来院氏旧領内に確保するためであったことがうかがえる。し
かも、そうした噂が世間に流れるのを恐れ、配慮するよう老中に求
めるというのは、随分虫のいい話である。

これに対する義久の回答は次のようなものであった（同上）。

山田御望之由御申候、是又一城有処にて候間、平地などには違
候、城を御参せ候する事ハ如何之由候、殊更今さへ金吾様（島津歳久）など
ハ、中書様之御分限御覽し合候て、色々御任之事共候、況や彼
城所領など御参せ候ハ々、弥々御任者尽候ハしか

（意訳）山田を希望しているとのことだが、これも一城ある場所なので、
平地などとは違い、城を与えることはいかがなものか。特に、今でさ
え歳久が家久の分限（所領）をみて、いろいろと不満をいうことがある。
いわんや、城と所領を与えたならば、いよいよ不満が尽きることが無
くなるではないか。

つまり、家久の要請を却下したのである。その理由は、家久の兄
歳久が現時点で家久の厚遇に嫉妬しており、これ以上拗らせたくな
いというものであった。兄義久は家久の企みを知った上でこれをか
わしつつ、兄弟間のバランスをとっていたことが窺える。

さらにもうひとつ、この時期に家久は、謀略をめぐらしている。

同年八月、和泉（鹿児島県出水市）の領主島津薩州家義虎と、東
郷氏の軍事抗争が勃発し（『覚兼日記』八月九日条）、翌月には老中
が薩州家義虎に関する「雑説」（謀叛の風聞）について協議してい
る（同九月二日条）。同月二六日、島津薩州家から一族島津伊勢守
忠陽ら弁明の使者が鹿児島に來たり、次のようなことを述べている
（同九月二六日条）。

彼雑説、中書様御前より被仰儀候間、急度義虎申來野へ御越候
而、可被仰開候、若又不被仰開候ハ々、其時御身上可被相終之
由候通、彼久屋齋喜入撰州へ被申候間、本若州以、中書様へ此
由御事問共候、貴殿様より被仰候つる通、又ハ中書少も彼儀無
御存知通、直二和泉之使者「へ」物語候

（意訳）薩州家謀叛の雑説とは、家久から出たものであり、「急ぎ義虎
が申木野に來て弁明するように。もし弁明が無いのならば、御身（義虎）
は終わりになるぞ」と言ったらしい。そこで、家久に事実確認をした
ところ、中書は少しもそんなことは知らないと答えた。

本人は否定しているものの、家久は、謀叛の噂を流して薩州家義
虎を脅迫していたらしい。弁明の使者は家久が原因ということに逃
れようとしたようであるが、兄義久は家久がそんなことをするはず
が無いとして、翌日薩州家の使者を厳しく詰問している。

後年、天正一二年（一五八四）一二月三日、家久の二男鎌徳丸
（一五七四〜一六一二）が、東郷重尚の養嗣子となつている（『覚兼
日記』同日条）。あるいは、既にこの頃から東郷氏と家久は親しい
関係にあつた可能性があろう。その東郷氏と薩州家の抗争が始まり、
家久が同家を脅迫したのであろうか。この時期、島津氏は日向伊東
氏やこれと通じる肥後相良氏との対決を控えていた。そうしたなか、
島津本宗家に従属しながら独自に外交活動をおこない、不穏な
動きを示す島津薩州家義虎を牽制すべく、家久の謀略であることを
百も承知の上で、兄義久がこの「雑説」を利用したとも考えられよう。
兄義久は、この頃既に弟家久の謀略家ぶりをよく知った上で、利
用していたことを指摘しておきたい。

（六）家久の上洛・伊勢参詣

天正三年（一五七五）、戦いが一段落ついたこともあり、多くの
島津氏家臣から上洛や伊勢参詣の希望が殺到する（『覚兼日記』天

正二年十月十日条など)。そして、島津氏一族の代表として、まず上洛を許されたのが、家久であった。

同年二月七日に鹿児島を発ち、同年七月二〇日に串木野に戻るまで、半年に及ぶ道中は、家久自身が日記を付けており(「中務大輔家久公御上京日記」⁽⁸⁰⁾)、その詳細を知ることができる。この道中記は、当時の旅の様子や洛中・洛外の状況を詳細に記した貴重な史料として、幅広く紹介・活用されている。

なかでも、四月二一日、石山本願寺攻めから帰京した、織田信長本人を目撃しており、馬上で居眠りする信長の様子や信長馬廻衆の装備などを詳述している。時代劇でもよく登場する信長の馬印「黄永楽」(黄色地に永楽銭の家紋)を实見したことを記した唯一の一次史料とも指摘されている⁽⁸¹⁾。さらに、石山寺参詣からの帰途、五月一四日には、明智光秀に對面し、彼の居城坂本城(滋賀県大津市下阪本)に招かれている。

なお、この時家久は、茶の湯の作法を知らなかったため、光秀の茶席で白湯を所望している。こうした不作法と、京都への途上、家久の部下が気に入らない関守や船頭に暴行を加えていることから、家久を「乱暴・粗野で文化的素養の無い人物」と強調する傾向がある。

むしろ、この道中記で注目すべきは、在京中の旺盛な見物欲にあるのではないか。京都滞在中、家久は当代きつての連歌師・里村紹巴(一五二五〜一六〇二)の世話になり、その弟子・心前の寮(別荘)を主たる宿舎とし、紹巴や心前・昌叱(紹巴娘婿)の案内で精力的に観光に向かっている。古くから歌に詠まれた景勝地や歌人の旧跡・文物(嵐山、二尊院の西行庵跡、藤原俊成の墓、小野小町絵像、藤原定家旧居跡、式子内親王墓、志賀の山越など)、『源氏物語』・『平家物語』ゆかりの場所・文物(法輪寺、六波羅、法住寺殿跡、心前所有の『源氏物語』、木曾義仲最期の地、牛若丸ゆかりの僧正か谷など)が主な観光先である⁽⁸²⁾。

さらに、里村紹巴からは、和歌・連歌に関する「三部集」の講釈を受けており、家久自身も何度か連歌会にも参加している。また、近江に足を伸ばした際は、紫式部が『源氏物語』を記した石山寺を訪れ、里村紹巴に桐壺巻を読んでもらい、鞍馬寺に赴いた際も、紹巴が若紫巻を読み聞かせている。

既述のように、上洛前から、家久は舅樺山玄佐の手ほどきを受けて和歌を詠み、『源氏物語』など文学作品にも親しんでいたからこそ、上洛時にその故地を積極的に訪れたとみるべきであろう。家久は、島津氏一門中でもかなりの文化人・教養人だったのである。

さらに、家久は、薩摩への帰路、七月末には、シルバークラッシュに沸く石見銀山に立ち寄り⁽⁸³⁾、薩摩から来航したものとたちとも交流している。さらに、七月一二日には平戸に入り、翌日「唐船」に乗船して南蛮から豊後殿(大友宗麟)への進物である「虎の子四疋」を見物している。京の雅な文化や織田信長の快進撃を目の当たりにするだけでなく、山陰や西九州と大陸・東南アジアを結ぶグローバルな人的・物的交流を見聞したことは、家久の人格形成、その後の政治的・軍事的判断に大きな影響を与えたのではないかと推測される。

第二章 佐土原領主・島津家久

(一) 高城・耳川合戦

同盟関係にあった大隅国衆が島津氏の軍門に降り、孤立無援となつた日向の伊東氏は、天正四年(一五七六)八月、高原城(宮崎県高原町西麓)を攻略されると、真幸院三之山(同県小林市)・須木(同市須木)などを放棄し、急激に弱体化していった。

天正五年(一五七七)一二月、伊東領西端に位置していた野尻城の福永丹波守が、島津氏の調略に応じて内通すると、次々に伊東氏

を見限る動きがおき、伊東義祐は一門・近臣のみを連れて、豊後大友氏のもとに落ち延びていった。いわゆる「豊後落ち」である。

伊東義祐らを受け入れた大友氏は、伊東領国の回復を大義名分として、日向進攻を図る。

天正六年（一五七八）三月、宗麟の嫡男で、既に家督を継承していた大友義統は、島津方に寝返った日向国縣（宮崎県延岡市）の国衆土持親成征伐のため出陣し、四月一〇日に土持氏の居城松尾城を落としている²⁴⁰。これより前、三城（門河・塩見・日智屋）を中心に、伊東氏旧臣の多くが蜂起しており、日向国北半分は大友氏の勢力圏となっていた。

翌天正七年九月、大友宗麟は五万ともいわれる大軍を率いて日向に進攻する。一説には、日向に「キリスト教的理想国家」を建設するつもりであったともいい²⁴¹、この時縣周辺の多くの寺社が破却されている。宗麟は、無鹿（宮崎県延岡市無鹿）を本陣として留まり、本隊は田原紹忍を大将として南下を続け、一〇月二五日までに、新納院高城（宮崎県木城町高城）を包囲する。

この時、島津家久は、高城城主山田有信救援のため、樺山規久・鎌田政近とともに同城に入っている。島津義久や真幸院の義弘も、高城救援のため出陣し、一月一日には、島津義弘が大友方陣地の一部を攻略している。そして、翌一月二日、大友勢が小丸川を渡河して島津勢に攻めかかり、決戦となった。いわゆる「高城・耳川合戦」である。この戦いで島津勢は大友勢を撃破し、家久も高城から出て大友勢を追撃。大友勢は、重臣らを含む二・三千人が戦死する大敗を喫し、日向から撤退していった。

この大勝利により、日向国のほぼ全域が島津氏の勢力圏となり、島津義久は父祖以来の念願であった、薩摩・大隅・日向三か国の統一を果たしたのである。

（二）家久の佐土原入城

伊東氏の旧領はすべて島津氏によって収公され、前述の「地頭衆中制」が適応された。新たに地頭として配置されたのは、いち早く島津方に寝返ったものをのぞき、ほとんどが薩摩・大隅を本拠としていた島津氏の家臣たちであった（図②）。

そんななか、伊東義祐の居城であった佐土原に、領主として配置されたのが、島津家久であった。前年の大友氏進攻時に、伊東氏旧臣が蜂起したように、日向国は島津氏にとって全く新たな占領地と見てよく、天正九年八月に大友氏との和睦（豊薩和平）が成立するまで、大友氏の再進攻も予想された²⁴²。このため、これまで多くの戦いで武功をあげた家久を、日向国の最重要拠点に配置し、同国の治安維持、大友氏への抑えとしたのであろう。

なお、佐土原城の周辺には、先に家久と共に高城を死守した山田有信や鎌田政近ら、兄義久の信頼も厚い猛将たちが配置されたが、家久を補佐するとともに、「日州両院」と呼ばれた宮崎平野部を統轄するために、義久が特に配置したのが、宮崎地頭の上井覚兼（一五四五〜八九）である。覚兼は、天正四年末〜翌年初めに奏者から老中に抜擢された、義久の信任厚い吏僚であるとともに、高城・耳川合戦でも一隊を率いて戦った指揮官であった²⁴³。前章（一五）で紹介した家久の謀略は、覚兼の記した『上井覚兼日記』によって判明したものである。この時、覚兼は川内担当奏者であり、家久の謀略好き側面をよく知っている人物でもある。恐らく、義久は、家久をよく知る上井覚兼を、佐土原近くに配置することで、家久の暴走を抑えようとしたのであろうが、後年、この覚兼も家久に取り込まれている。

(三) 高城・耳川合戦後の九州情勢

全盛期の太友宗麟は、根本分国である豊後・筑後に加え、筑前・豊前・肥前・肥後の六か国の守護職と、九州探題に補任されるなど、北部九州全域を勢力圏としていた。そんななかでおこなわれたのが、日向進攻であった。恐らく、その勝利を疑う者は無かつたであろう。



それだけに、天正六年(一五七八)一二月の高城・耳川合戦における太友氏大敗は、九州全域に大きなインパクトを与えた。直後から豊後国内では有力国衆の離反が相次ぎ、その混乱に乗じて、筑前の秋月種実、肥前の龍造寺隆信など、太友氏に従属していた有力国衆が次々と離反し、自立していったのである⁽²⁸⁾。

高城・耳川合戦前後、島津義久は龍造寺隆信と連携する姿勢を見せていたが⁽²⁹⁾、天正七年、城氏や名和氏の要請により、島津氏が肥後国に軍勢を進めると、利害が対立するようになり、島津氏はいったん肥後から撤退。代わって肥後国衆のほとんどが、龍造寺隆信に従属するに至る⁽³⁰⁾。

しかし、天正七年八月、島津義久は、義弘・歳久・家久らを総動員して肥後に進攻し、相良氏領内の水保城を包囲する。翌月、たまたま相良義陽は島津氏に降服する。さらに、同年二月、相良義陽は、島津氏の命により龍造寺方の阿蘇大宮司家領内に進攻し、同家の家宰的存在であった甲斐宗運(親直)の奇襲を受け、戦死

している。

すぐさま島津氏は、義陽の遺児忠房に人吉を安堵する一方で、八代・芦北両郡を接収し、八代古麓城を拠点に、肥後支配を進めていった。これにより、再び肥後国衆の城氏や名和氏は再び島津氏に従属し、龍造寺隆信との対立が決定的となったのである⁽³¹⁾。

この頃、龍造寺氏は、筑前の秋月種実と結び、筑前・筑後の大友方国衆を調略あるいは攻撃し、その勢力圏を広げつつあった。まさに、九州は、大友宗麟・義統父子、龍造寺隆信、島津義久の三氏が鼎立する状況となったのである。

なお、天正八年（一五八〇）八月、畿内を制圧した織田信長は、前関白近衛前久に命じて、島津氏と大友氏との和睦仲介を図った。島津義久は、なかなかこの要請に応じなかったが、天正九年六月に和睦仲介を受諾し、同年九月に両氏の和睦（豊薩和平）が成立している⁽³²⁾。

これ以降、島津氏の当面の敵は、肥後国内の反島津方国衆とその背後にいる龍造寺隆信となったのである。

（四）家久の人脈と策動

天正一〇年（一五八二）冬、島津義弘を指揮官として、歳久・家久ほか諸将が、肥後八代に集結した。このときの出陣は、いまだ帰順していない阿蘇大宮司家とその家宰的存在の甲斐宗運、肥後国中の隈部氏・合志氏らに圧力を加えて帰順させ、肥後国中を制圧することを目的としていた。

その一方で、肥前国高来郡、島原半島の国衆有馬鎮貴（のちの晴信）が、島津氏に従属を誓い、救援を求めている。有馬氏は、全盛期には肥前国東部数郡を支配下に収めていたが、龍造寺隆信の圧力により、島原半島南半分ほどに勢力を縮小していた。

この有馬氏が島津氏に従属する際、「取次」（有馬殿出頭之御取次）

を務めたのが、島津家久であった。天正三年の上洛からの帰途、家久は、平戸の松浦隆信と会っているが、それ以外にも九州西海岸沿いの国衆たちとの関係が出来ていたのかもしれない。また、家久の上洛中、肥後国宇土の名和顕孝も里村紹巴の世話になっており、家久とも連歌に興じている。こうした人脈が、島津氏の肥後進攻に伴い、大きな意味をもったとみられる。

先述のように、このときの出陣は肥後制圧が目的であったが、有馬氏の要請に応じ、一部の軍勢を島原半島に派遣することになり、川上久隅を大将とする軍勢が、一月に渡海していった。これらの軍勢は、長駆、島原半島西北部の千々石城（釜蓋城、同県雲仙市千々石町）を攻略するなど一定の成果を挙げ（『覚兼日記』十二月五、七日条）、一月七日に肥後に撤退する。

その一方で、家久は不可解な外交活動を始めていた。家久は肥後に出陣する一方で、佐土原に残った家臣（内衆）本田久親（家久母橋姫の兄）や高崎越前守らに命じ、日向国美々津（宮崎県日向市）にて甲斐宗運側と和平交渉をさせていた。甲斐宗運は、もともと日向国鞍岡（同県五ヶ瀬町）の出身であり、当時「山中」「山内」と呼ばれた、現在の宮崎県美郷町から五ヶ瀬・高千穂にかけての山間地域は、阿蘇社Ⅱ甲斐氏の影響下にあつたとみられる。

この家久内衆による和睦交渉は、肥後八代にいた島津義弘や伊集院忠棟・上井覚兼ら老中たちには知らされていなかったようであり、人質など和睦の条件をめぐって混乱を来したりもした（『覚兼日記』同月二五日条）。しかし、一月三日、この和睦が偽りでは無いかと疑いつつも、義弘らは甲斐宗運との和睦を受け入れる（『覚兼日記』同日条）。

この家久主導の和睦交渉は、肥後での戦闘を早期に終結させ、有馬氏救援を本格化させることを目的とした、家久の策動であつたと思われる⁽³³⁾。

同年一二月一八日、龍造寺勢が有馬領を攻撃するとの情報があり、八代に挨拶にきていた有馬鎮貴が急遽帰国することになった。そのことを家久に伝えたところ、家久自身が援軍として渡海する、しかも老中上井覚兼も同道したいと、突然言い出したのである（『覚兼日記』同日条）。これを聞いた上井覚兼は、次のように述べている。

有馬殿誰覚共候する衆同心之由候哉、中書公如御存知、肥州へ諸軍衆、殊劫者^{（劫）}などハ皆々被罷居候、其上取前出頭之刻、御番衆等者入間敷通被申候キ、到縁如此被申事、不及得心候、中書公御前より然々此段被仰、閉目候て肝要之由也、兼又、家久御渡海之事者不軽事候、我々分別としてハ難申候、

今回の肥後攻略のための出陣衆であり、家久のような「巧者」（戦上手）はここに留まるべきである。また、家久の渡海は軽々しいことでは無く、我々老中では判断できない。つまり、太守義久の判断を仰ぐべきと、出陣を思いとどまるよう説得している。

先述のように、家久は、有馬氏が島津氏に従属した際の「取次」であった。大名と国衆間の取次は、国衆の帰順・従属を取り持ち、大名との交渉にあたる一方、従属した国衆に安全保障上の危機が生じた場合、それを救援する義務が生じる^{（30）}。家久このときの行動原理は、取次として有馬氏救援の義務があったからともいえよう。

このとき、家久が八代まで出陣したのは、端^{（はな）}から肥後攻略をするつもりはなく、有馬氏救援を目的としたと思われる。そのために、事前に甲斐宗運との和睦交渉を命じていたのであろう。

このように、家久は目的を達成するためには、見方をも欺く傾向があったのである。

（五）龍造寺隆信との対決とその影響

最終的に、島津家久が目的としていた有馬氏の救援は、天正一二

年（一五八四）に実現する。しかも、このときの出陣では家久すらも想定していなかった大きな結果をもたらす。

同年正月、鹿児島で開かれた談合の結果、有馬鎮貴救援のため出陣することを決定する。三月一六日頃、島津義久は、肥後佐敷（熊本県芦北町）に老中伊集院忠棟・本田親貞らを率いて出陣し、真幸の島津義弘、祁答院（鹿児島県さつま町、薩摩川内市祁答院町）の島津歳久も八代まで出陣するが、家久は、彼らの着陣を待たずに、日向衆・薩摩衆を中心とする有馬渡海衆を編成し、島原半島に向けて出陣していった。このときの渡海衆は、家久・忠豊（のちの豊久、この時点では元服前）父子のほか、川上久隅（薩摩蘭牟田地頭）・平田光宗（老中）・新納忠元（薩摩大口地頭）・川上忠智（薩摩栗野地頭）・忠堅父子ら薩摩衆と、鎌田政近（日向都於郡地頭）・山田有信（日向高城地頭）・上原尚近（日向飢肥地頭）ら日向衆、合わせて三千ほどだったという^{（31）}。これに、天草勢と有馬勢が加わるとはいえ、八代に集結した軍勢に比べると、決して大軍とは呼べない兵力であった。

家久の当初の目的は、龍造寺氏に与する国衆島原純豊が籠もる浜の城（島原市中堀町）の攻略にあった。しかし、この動きを察知した龍造寺隆信は、急遽本拠佐賀から出陣し、浜の城救援に向かった。後藤家信（隆信二男）・多久信鎮（隆信三男）・江上家種（隆信四男）・鍋島信生（のちの直茂）ら五万七千騎（「イエズス会日本年報」によると二万五千の戦闘員）を率い、三月一九日には、神代（長崎県雲仙市国見町川北）に着陣したという^{（32）}。

しかし、家久らはこの龍造寺勢の迅速な動きをつかめなていなかった。三月二五日、有馬渡海衆の老中平田光宗・島津忠長から使者が到着し、「龍造寺隆信が伊佐早（長崎県諫早市）に到着しており、近々島原の陣に攻め寄せるつもりであるとの情報がある。島原攻めだけならともかく、龍造寺勢との戦いとなれば兵力が不足する」と

して援軍を要請している（『覚兼日記』同日条）。恐らくこの使者が島原を出たのは、同月二三日頃であろう。決戦前日まで、家久は敵の主力が至近距離まで近づいていることに気付いていなかったようである。

しかし、三月二四日、午前八時から正午過ぎまで続いた戦闘で、島津・有馬連合軍は、龍造寺勢の猛攻をしのぎ、突撃した川上忠堅の部隊が、龍造寺隆信を討ち取ることに成功する。大将の戦死により、龍造寺勢は敗走し、二千余の戦死者を出したという⁽³⁷⁾。一方、島津方の戦死者は二百五十人内外という圧勝であった。これが「沖田畷の戦い」である。

龍造寺隆信を討つたことにより、大友・龍造寺・島津三氏の鼎立状態が崩れ、島津氏の影響力が北部九州にまで及ぶようになった。筑前の秋月種実は、沖田畷の戦い翌月の四月二四日、龍造寺隆信の長男政家との和睦仲介を島津氏に申し入れる。島津義久は、龍造寺政家らの誓紙（起請文）提出をうけ、同年九月末、和睦を受諾する。これにより、龍造寺氏との和睦を仲介した秋月氏は、島津氏の従属国衆となり、島津氏は九州の内六か国（薩隅日三か国に加え、肥前・肥後・筑後の三か国）を制したのである。

先述のように、国衆が従属するということは、大名にとつてその国衆に対する安全保障義務が生じることになる。これ以前から、龍造寺・秋月両氏は、豊後大友氏と筑前・筑後の領有をめぐる対立・抗争を繰り返していた。特に、龍造寺隆信が戦死すると、大友氏の筑前・筑後支配を支えていた、立花城城督・戸次道雪（鑑連、？、一五八六）と宝満・岩屋両城城督・高橋紹運（鎮理、一五四八、八六）は、早速、筑後に進攻して龍造寺方諸城の攻略を図っていた。秋月氏は、龍造寺氏の求めにより、島津氏に対し、大友勢を筑後から排除するように求め、一方、戸次・高橋両名も島津氏に対し、豊薩和平に基づき、共同して龍造寺氏を攻撃するよう求めてきたので

ある。

三氏の鼎立状態が崩れ、島津氏は結果的に大友・龍造寺両氏とも和平を結んだ結果、両氏の板挟みとなつてしまったのである。結果的には、島津氏は龍造寺氏との和平を重視する。天正一二年一〇月一七日、島津氏老中は、戸次・高橋両名に対し、島津勢を筑後から撤退させることを条件に、大友勢も筑後から撤退することを求め、これを履行しない場合、島津氏への敵対行為とみなすとの最後通牒を突きつける。

結果的に、大友勢は、翌年九月一日に戸次道雪が陣没するまで筑後駐屯を続け、島津家中は大友氏との決戦やむなしとの意見が強まつていく⁽³⁸⁾。

(六) 戸次道雪・高橋紹運の家久評

龍造寺隆信の戦死を受け、筑後に進攻した大友氏重臣戸次道雪・高橋紹運は、いずれ島津氏との対決は避けられないと考えており、その場合、筑後に進攻するとにらんでいた。

天正一二年四月一六日、戸次・高橋両名は、筑後矢部を本拠とする大友方国衆・五条鎮定に対して書状を送り、こうした見方を示している⁽³⁹⁾。この書状中に、島津義弘・家久兄弟について記した部分があり、大友家中きつての猛将二人が、兄弟をどう評価していたかがうかがえ、興味深い。

去年以来至嶋津兵庫頭殿・同中務太輔殿、^(家久)度々使者飛脚差遣、様躰能々致見聞候、右御両人者、何様於武篇者、被取覚たる人躰候ハ、就中家久御事者、大酒其外徒之遊覽ヲ確停止候而、武方計ニ被入精、殊外尖人躰ニて御座候由、淵底承及候、

いずれ対決することになるであろう義弘・家久二人に対し、天正一一年以降、たびたび使者や飛脚を派遣して、ふたりを観察してき

たという。ふたりとも「武篇」は軍事を得意とする武将であるが、特に家久は、大酒など余計な遊びをすつかりやめて、軍備ばかりに力を入れる、とても「尖った」人物だと非常に警戒している。

この二人が警戒した義弘・家久兄弟が、筑後に攻めてくることは無かったが、天正一四年末以降、大友氏を窮地に追い込んでいく。

第三章 豊後進攻と謎の急死

(一) 家久による日向山中調略活動

前章では、島津家久が九州西部にもつ人脈と外交・軍事を明らかにしてきたが、ここでは日向国内、特に山間地域への調略活動について明らかにしていく。

前章(四)で、天文一〇年(一五四一)冬の肥後出陣に際し、家久が家臣に命じ、美々津にて阿蘇大宮司家重臣甲斐氏への和睦交渉にあたらせていたことを指摘した。この美々津に注ぐ耳川をさかのぼった山間地域を当時は「山中」・「山内」と呼んでいた。

天正五年(一五七七)、伊東義祐の豊後落ち以後、伊東氏旧臣が蜂起したのもこの地域であり、阿蘇社の信仰圏として甲斐氏の影響力も強かった地域である。家久は、この山間地域の掌握こそが、島津氏の肥後支配、さらには大友氏と対抗するために必要不可欠と考えていたようである。

この山中・山内の有力者のひとりに、七ツ山の甲斐左近将監という有力者がいた。現在の宮崎県東臼杵郡諸塚町大字七ツ山に今もお住まいのご子孫宅に、二通の中世文書が残されている。

一通は、天正一〇年(一五八二)四月一四日付の甲斐左近允宛甲斐親英感状である⁽³⁰⁾。「於今度其堺每篇之調略、被勸忠意之段、細碎令承知候、何様永々不可有忘脚候、然者七山之内御祓之村

八百分進之置候」というものである。甲斐親英とは、甲斐宗運の長男であり、甲斐左近允(将監)が、その意向を受けてこの地域の調略にあたっていたこと、その恩賞として所領を宛行われたことがうかがえる。

これから一年後の天正一一年四月一九日、『覚兼日記』に次のような記述が見える。

從佐土原(家久)御使者高崎越前守被越候、趣者久御無沙汰之段、次七山左近将監去年已来別而辛勞共申候間、彼山統二相応之処一ヶ所遣られ候て可然之由也、尤令存候間、先々一ヶ処落着させられて候て可目出候段、御返事申候、

家久の使者高崎越前守が上井覚兼のもとを訪れ、七山左近将監が去年から家久のために奔走してくれているので、七ツ山続きに相応の所領を与えたいとその了承を求めたようであり、覚兼も承認している。

その結果、家久から出された書状が、もう一通の文書、つまり天正一一年卯月二〇日付の甲斐左近将監宛島津家久安堵状である⁽³¹⁾。これには、「堺目数ヶ度往還辛勞之至、無其紛候、就夫松賀比良知行之事、於永々令安堵者也」とある。一年前まで、甲斐親英のために調略にあたっていた甲斐左近将監こと七山左近将監が、一転して家久の配下となり、阿蘇氏領との境目の往還で奔走し、松賀比良の知行を安堵されたのである。この往還での「辛勞」とは、阿蘇方諸將の調略とみてよいだろう。この段階で、家久による山中・山内への調略活動は、かなり進んでいたのである。

天正一三年(一五八五)に入ると、既述のように、筑後の支配権をめぐる大友氏との関係が悪化していた。加えて、同年八月上旬には、四国に進攻した羽柴勢に長宗我部元親が降伏し、秀吉の勢力圏が四国全域に及ぶようになっていた。同月一〇日には、山中から、「大

友氏が阿蘇家が熟談するとともに、高知尾（宮崎県高千穂町）の三田井親武やその重臣甲斐長門守（宗攝）に鎧兜を贈るなど、各地に調略を行い、縣出陣の際の協力を依頼している」との情報が家久に届いている。この大友氏の調略活動の背後には、秀吉がおり、「大友氏に対し、羽柴秀吉から菊田名字の使者が下向し、調略資金として金箱が贈られた」との情報ももたらされている（『覚兼日記』同目条）。

この直前の七月三日、阿蘇家を支えていた甲斐宗運が亡くなっており、この機会に大友氏が再び同家を寝返らせようとしていたのであり、阿蘇家と豊後を結ぶルートとして、高知尾の掌握を大友氏が図ろうとしていたのである。

この大友氏の活動は成功したようであり、八月十日、阿蘇氏は突如島津氏の出城である花之山城（熊本県宇城市豊野町上郷）を攻略。城番の鎌田政虎（都於郡地頭鎌田政近の長男）・木脇祐昌らが戦死している（⁴²）。

これにより、阿蘇氏追討の大義名分を得た島津氏は、既に肥後八代に入っていた島津義弘や老中伊集院忠棟・島津忠長が領内に肥後出陣を求めた。この時、島津家久は上井覚兼ら日向衆を誘って、日向北部の縣を視察しており、大友勢進攻の際の対応を協議していた。同年八月二十七日、家久は太守島津義久の使僧に対し、興味深い話をしている（『覚兼日記』同日条）。

右松備後守、去々年已来山中に被柄繰人候、頃彼者へ使被遣候へは、連々申候義、干今相異有ましく候、此節おほしめしたたれ候はは、御奉公一途申へく候、無其義候はは、御悩には罷成ましく候へ共、爰より御敵たるへく候、其故者、従豊後柴田治右衛門尉・小田原、高知尾へ来候て逗留いたし、爰元手切之段申定罷歸候、来十二三日、必彼兩人山中へ来候て、一途三城口へ可相絡候、此

方から繰付候者、廿七八人も候、左候へは、田代・字名間辺輒かるへき由申来候、如何候て可然候する哉、八城へも申入候、

家久は、去々年すなわち天正一一年頃から、右松備後守という家臣を山中調略（柄繰）のため派遣していたという。前出の七ツ山（甲斐）左近将監への調略も、彼の成果かもしれない。その後の、「此節思し召し立たれ候はは」がいかなる意味か難しいが、恐らくより本格的な調略活動と軍事行動を認めるよう、決断を促したと解釈したい。ここで調略しておかなければ、大友宗麟の側近・柴田礼能らが高知尾に逗留して三田井氏に島津氏との手切れを求めており、来る八月一二、二三日頃には三城（門河・塩見・日智屋、宮崎県日向市）方面に攻撃してくる可能性があるとしている。右松備後守は、既に二七、八人を調略しており、このまま調略を進めるべきと進言している。

この後、上井覚兼ら多くの日向衆は、島津義弘の催促に応じ、肥後八代へと出陣していき、同年閏八月、阿蘇大宮司家領への進攻を開始。同月一三日に阿蘇氏南端の拠点・堅志田城（熊本県下益城郡美里町中郡）を攻略することに成功し、同月一五日には、甲斐氏の居城である御船城（同郡御船町）をも接收している。そして、同月一九日には、矢部（熊本県上益城郡山都町）の阿蘇氏当主惟光が降伏し、肥後を完全制圧することに成功する（『覚兼日記』）。

この間、家久は何をしていたのか。
閏八月二十九日、御船に滞在していた島津義弘・上井覚兼らのもとに、島津家久が矢部經由で使者を送ってきた（『覚兼日記』）。家久は、三城（門川・塩見・日知屋）から、軍勢を進めて田代（東臼杵郡美郷町西郷区田代）に布陣。早々に三ヶ所（西臼杵郡五ヶ瀬町三ヶ所）を平定したとして、矢部經由で連絡してきたのである。

先述のように、大友氏は高知尾經由で阿蘇氏を調略しており、三

ヶ所は高知尾から矢部へのルート上に位置する。この地を制圧することで、家久は大友勢の阿蘇氏支援を阻んだのである。

さらに、九月一〇日、再び家久は義弘らが滞在中の御船に使者を派遣し、高知尾の三田井親武が人質を出して降伏したことを伝えてきた。それと共に、肥後出陣中の日向衆を、肥後から高知尾に出陣させ、そのまま「豊州へ御弓箭」すなわち豊後大友氏攻めを開始することを求めてきたのである（『覚兼日記』）。

この時、義弘や上井覚兼は、豊後進攻には「神慮」を伺う必要があるとして、拙速な行動をとらないよう求めているが、家久は、この段階で明確に豊後進攻を意図していたのである。

(二) 豊後進攻計画と家久の暴走

既述のように、天正一二年（一五八四）末の段階で、島津・大友両氏の関係は悪化し、翌天正一三年九月には、島津家久が即時豊後進攻を主張していた。家久は、早期豊後進攻派の急先鋒であったが、兄の太守義久は、大友氏との全面抗争に慎重姿勢で、豊薩和平を維持すべきとの立場であった。

しかし、謀略を得意とする家久は、豊後進攻に向けて暗躍している。おりしも、天正一三年一〇月豊後南郡⁽⁵⁾の国衆・入田義実（宗和）が、肥後在陣中の新納忠元を取次として、島津氏への従属、すなわち大友氏からの寝返りを申し出てきたのである。

「境目の国衆の帰属変更は、戦国大名の戦争の一大要因」であり⁽⁶⁾、豊後へ進攻したい家久にとっては大きなチャンスであった。入田氏の本拠緩木城（大分県竹田市九重野）は、豊後国の南端に位置し、家久が帰順させた三田井氏の高知尾に隣接している。家久は、新納忠元に代わって入田氏の取次となり、入田氏の寝返りを利用しようとしたのである。

天正一三年一月二〇日、家久の家臣田中筑前守が、上井覚兼の

もとを訪れ、入田氏が来たる二四日、大友氏に対し手切れを通告するので、豊後・日向の国境、宇目口・佐伯口に軍勢を派遣して欲しい、と言っているとの情報をもたらす（『覚兼日記』同日条）。覚兼は早急な出兵に反対するが、田中筑前守はそのまま大隅正八幡宮（現在の鹿児島神宮）参詣中の島津義久のもとに行き、入田氏手切れの件を報告した。

しかし、田中が義久に報告した内容は、「去十六日、入田方豊後へ手切被仕候て、南郡之事悉破滅候て、煙中二有由申候」と、既に入田氏が手切れし、豊後南郡では戦闘が始まったというものであり（『覚兼日記』一月二六日条）、覚兼への報告とは異なるものであった。覚兼はこれを義久に通報し、肥後に確認を取ったところ、入田氏の手切れは家久に勧められたことが判明したのである。

家久の策動に怒った義久は、上井覚兼に対し、「堺目より何条宜儀を申来候共、鹿児島へ御談合申候ハて、楚忽二軍衆打出し候する事有間敷之段、被仰候、中書公へも、此由自身参候て可申之」（豊後境からどのような連絡があつても、鹿児島での談合無しで勝手に出陣することの無いよう、家久にも覚兼みずから説得するように）と命じている。

またもや見方を欺こうとした家久の謀略は、却って豊後進攻を遅らせる結果となったのである。

(三) 豊後進攻の明暗

島津家久の策動は失敗に終わったが、大友氏との決戦は避けられない状況であった。天正一四年（一五八六）正月、鹿児島に大友氏との開戦やむなしとの決定に至るが、豊後進攻はたびたび延期され、同年八月には、大友氏を支援するため、豊臣秀吉が派遣した黒田孝高ら先鋒が、豊前に上陸している。

そして、同年一〇月、ようやく豊後進攻が実現する。島津義久は、

日向国塩見（宮崎県日向市）まで出陣して指揮を執り、肥後口からは島津義弘が、日向口からは家久が大将として進攻した⁽⁴⁵⁾。

日向口から進攻した家久勢は、順調に北上し、三重松尾城（大分県豊後大野市三重町）を制圧すると、大野川沿いに、大友氏の本拠府内（同県大分市）に向けて進軍していった。そして、同年二月、府内南側の鶴賀城を包囲すると、同城救援のため出陣した、豊臣勢の仙石秀久・長宗我部元親ら率いる四国勢と戸次川（大野川）を挟んで対峙する。同月一二日、両者は衝突し、四国勢は長宗我部元親の長男信親や十河存保が討死するなど大敗を喫し、撤退していった。家久勢はその勢いのままに府内を攻略し、このまま越年する。

一方、肥後口から進攻した島津義弘勢は、苦戦を強いられた。特に、岡城（大分県竹田市竹田）に籠もる志賀親次は頑強に抵抗し、義弘はついにこの城を落とすことが出来なかった。やむなく義弘は、北に攻撃目標を変え、玖珠郡へと進攻していった。この間、岡城からの反撃に備え、翌天正一五年正月五日、義弘は家久と協議し、家久が朽網の守備に就き、義弘が玖珠郡に陣替えしたという⁽⁴⁶⁾。

こうした状況に、家久はいらだち、正月一〇日頃、密かに義弟樺山忠助（紹劍）を呼び寄せ、次のように愚痴をこぼしている⁽⁴⁷⁾。

豊州を島津殿御敷可有異、不取覚候、其故ハ諸人物ほしかりに打成候、分限を望心計にて、更に手をくだく事なし、扨又、武庫様御手花無然々候二付、あらそう様成御気分、総大将之御振舞二不成合候、是悪事共候、伊集院右衛門大輔も底意地不可然候、我々も兎角申延候而、帰申度候と中務被仰候、

（意訳）出陣衆は欲ばかり出して合戦を避け、兄義弘も軍功がパツトせず、自分と争うような状況で、総大将とは思えない振る舞いである。

伊集院忠棟も「底意地」が悪く、もう撤退したい。

戦況が思うようになくなり、諸将間の関係も悪化していたよ

うである。これでは戦いにはならない。同年三月、豊臣勢本隊が続々と九州に上陸するなか、島津勢は豊後から撤退していった。

（四）家久の降伏と謎の死

島津勢は、大友勢や地下衆の追撃に多大な被害を出しつつ、日向あるいは薩摩へと撤退し、豊臣勢を迎え撃とうとした。

豊臣秀吉は、天正一五年（一五八七）三月二五日、赤間関（山口県下関市）に到着し、総勢一八万といわれる大軍を二つに分ける。秀吉自身は筑前から肥後、薩摩へと進軍し、弟秀長が豊後から日向へと進攻した。

秀長勢は、四月六日、山田有信・喜入季久・平田増宗・本田正親ら兵三百が籠もる、新納院高城（宮崎県木城町高城）を包囲する。秀長勢の総数は、後日秀吉が徳川家康に送った書状によると、十余であったという⁽⁴⁸⁾。秀長勢は、小丸川の南側丘陵、根白坂（同町大字椎木）に、宮部継潤と黒田孝高らが強固な陣城を構築し、島津勢に備えた。四月一七日、島津義弘・家久・忠豊・忠隣（歳久養子、義久外孫）らは、この根白坂の陣を攻略しようと激しく攻撃するものの、島津忠隣が戦死するなど多くの被害を出して敗退する（根白坂の戦い）。これにより、島津氏の組織的抵抗は終了した。

四月二二日、島津氏の筆頭老中伊集院忠棟は、秀長勢の先手陣所に入り、島津義久の赦免を願い出るとともに、新納院高城・財部両城を明け渡した⁽⁴⁹⁾。これは恐らく義久の指示であり、この時点で島津氏は降服の意向を示したとみられる。義久自身は、五月八日、剃髪の上、秀吉が本陣を置いた泰平寺（鹿児島県薩摩川内市大小路町）に入り、秀吉に見参、正式に降伏した⁽⁵⁰⁾。

一方、島津家久は、根白坂の戦い敗戦直後、佐土原城を豊臣勢に包囲された際、当時秀長の家臣であった藤堂高虎の説得に応じ、降伏したようである⁽⁵¹⁾。降服した家久は、豊臣秀長に対し驚くべき

申し出をしたようである。同年五月二六日、島津義弘宛豊臣秀吉朱印状には、次のような記述がある⁽⁵³⁰⁾。

島津中務少輔儀、人質を出居城を明、中納言^(秀長)二相つき上かたへ罷上、似合之扶持をうけ可有奉公由、神妙被思召候間、日向内佐土原城并城付之知行以下あげ候とて、可被召上儀ニあらず候間、是又中務少輔ニ可被返下事

家久は降伏後、秀長と共に上方に上り、そこで似合いの扶持を受けて奉公したいと申し出たのである。これに対し秀吉は、神妙であるとして、所領を還付する意向を示している。そして実際、翌五月二七日付で、豊臣秀長は家久に対し、佐土原城と本知行を返付している⁽⁵³⁰⁾。

家久が上洛を希望したことは、義久の耳にも入っており、五月二六日、義久は家久に対し書状を送り、家久が上洛を希望しているとの「世上風聞」に懸念を示し、「公界」に背かないよう十分な分別が肝要と記すとともに、上洛はしっかり納得してからするように求めている⁽⁵³⁰⁾。

なお、この直前、五月一四日、豊臣秀長は島津義弘と会見すべく都於郡を出発する。この時、家久は「病中」であったが、秀長に同道して野尻^(のじり)まで向かった⁽⁵³⁰⁾。しかし、ここで病状が悪化し、佐土原に戻った家久は、六月五日に急死する(享年四一)。

家久の死因について、近世の家譜類は、羽柴秀長に同行して野尻に行き、秀長と同席して食事を共にした際、「鳩毒」^(ちんどく)(ヒ素を主成分とする毒)を盛られて重篤となり、佐土原に戻って亡くなったと記す⁽⁵³⁰⁾。

五月一四日の時点で「病中」だったことを考えると、病死とも考えられるが、毒殺説は当時から噂になっていたようである。ルイス・フロイスの『日本史』は、「美濃殿(秀長)は、薩摩国王の弟で勇敢な戦士であり老練な主将でもある中務(家久)と称する薩摩の総

指揮官が、今後、上の軍勢に対して何らかの策略を仕掛けることを恐れ、そうした不安を一掃しようとして彼のために宴席を設け、その饗宴の終わりにあたつて、日本の習慣に従つて盃をとらせた。そしてその酒の中に毒を混入するように家臣に命じた。中務はそれを飲み、三日後に、飲まされた新鮮な毒の結果であることが明らかなる徴候を見せながら死亡した」と、はつきり秀長による毒殺と記している(第二部八七章)⁽⁵³⁰⁾。

第四章 島津豊久の人となり

(一) 島津豊久の誕生・幼少期

島津家久の長男豊久は、元亀元年(一五七〇)六月一日、恐らく、父家久の居城である串木野城で誕生したとみられる⁽⁵³⁰⁾。母は、樺山善久(玄佐)の娘。幼名は豊寿丸、元服して又七郎忠豊と名乗る。一般に流布している豊久という名は、慶長四年(一五九九)二月、朝鮮出兵時の戦功により中務大輔および侍従に任官した際、忠豊から改名したとみられる⁽⁵³⁰⁾。豊久と名乗ったのは、二年足らずに過ぎないが、本稿では便宜上、豊久で統一する。

姉に祢寝重張室(一五六七〜一六二二)、佐多久慶室(一五六七〜一六四二)、弟に忠直(東郷重虎、一五七四〜一六二二)、妹に島津久信・相良頼安室(一五八三〜一六二九)がいる。

天正六年(一五七八)十一月の高城・耳川合戦後まもなく、父家久が日向国佐土原に移封されたのに伴い、豊久兄弟も串木野から移ったとみられる。

史料上の初見は、『覚兼日記』天正一一年(一五八三)四月一日条であり、上井覚兼の使者和田江左衛門尉殿が佐土原城を訪れた際、留守だった家久に代わり、「御兒様」が対応している。これが

豊久とみられ、一四歳であった。また、同年六月三日には、佐土原城下大中寺にて家久の父貴久の一三回忌法要がおこなわれた際、能が奉納された。この時、弟忠直とともに鼓を披露している（『覚兼日記』同日条）。

なお、豊久が美少年だったとの説がある。これは、文化九年（一八一二）成立の白尾国柱著『倭文麻環』巻三に、「息豊久は世に類ひなき容顔美麗なるのみならず、智勇卓犖たる少年」（家久の子豊久は、世に並ぶもののない美少年であるばかりか、智勇ともに抜きんで優れた少年であった）と記されていたことに基づく。幕末の説話集であり、そのまま事実とは認められない。後年の関ヶ原での討死に伴う顕彰により、美化されていた可能性はあろう。

加えて、『覚兼日記』天正一三年（一五八五）二月一七日条には、「從佐土原御使也、又七殿御兄弟三人、瘡瘡御煩被成候、蘇香円所持申候ハ々、進入可申之由也」とある。豊久兄弟は、これ以前から瘡瘡（天然痘を煩っており、家久が上井覚兼に対し、蘇香円（蘇合香（蘇合香樹の樹脂）を配合した強心気付け薬）を求めている。天然痘を患うと、頭部や顔面に発疹が生じ、それが化膿して膿疱になるため、完治しても痘痕となることが多い。あるいは、豊久にも天然痘の跡が残っていた可能性もあろう。

（二）豊久の初陣・元服

豊久の初陣は、第二章（五）で述べた、天正一二年（一五八四）三月の沖田畷の戦いである。『本藩人物誌』には、「忠豊拾五歳ニテ致初陣強敵一人ヲ討取候、後見ハ新納武蔵守忠元也」とある。

なお、前出の『倭文麻環』巻三「読龍造寺隆信碑并島津家久援軍紀事」には、「息豊久は世に類ひなき容顔美麗なるのみならず、智勇卓犖たる少年なれば、真先に馬を躍らして殺進すれば、相従ふ壯士共又七君打たすな我後れじと互に奨励まして鬼神も挫く勢に乗じ

ければ、川上上野介・相良四郎太郎・平田美濃守等の偏き大将も之が為に英気を弥長して、我先にと島原表に馳向ふ」とあり、先陣を切ったことになっている。

この時、豊久はまだ元服前であった。沖田畷の勝利ののち、家久父子は肥後八代に凱旋したようであり、同年四月一四日、八代にて元服している（『覚兼日記』同年四月二日条）。

元服後の豊久の動静はよく分からないが、『覚兼日記』にはしばしば登場する。その中に、現在まで続く狩猟に関する記述があつて興味深い。

『覚兼日記』天正一四年一〇月七日条には、次のような記述がある。

拙者も、穂村のこたく罷下候、又七殿御兄弟、越之尾のこたく、直二御出也、拙者も罷出候、食籠肴にて、御酒持せ申候てあけ候、従夫、越二御立候、鳥然々不越候、併十計留候、生鳥などにもさせられ候、（中略）深行まて酒宴・御雑談共にて候、又七殿よりも、御酒被下候、賞翫共申候也、

この日、豊久・忠直兄弟は、上井覚兼とともに穂村（現在の住吉神社周辺、宮崎市大字塩路付近）に来て、「越」と呼ばれる猟をおこない、鳥を生け捕りにしたようである。旧暦一〇月なので、鴨などの渡り鳥を捕っていたとみられ、これは現在も宮崎市佐土原町で続けられている「巨田池の鴨網猟」と同様の狩猟法（越網）とみられる。

なお、この狩猟ののち、豊久と覚兼らは深夜まで酒宴に及んでるが、『覚兼日記』翌日条には、「払暁御粥参候て、懸て越二御立候、我々ハ沈醉故、御跡より参候」と記されている。覚兼らがまだ「沈酔」（二日酔いカ）のなか、豊久らは早朝から「越」に励んでおり、十代から酒豪だったようである。

豊久の室は、父家久の従兄弟にあたる島津忠長の娘（一五七三―一六〇九）である。天正一三年八月四日、この島津忠長領であった石崎村（宮崎県宮崎市佐土原町）にて、家久領の住人が、忠長家臣佐司兄弟に撲殺される事件が発生し、家久の家臣が報復として佐司兄弟を成敗してしまう（『覚兼日記』同日条）。この家臣間の紛争は鹿兒島で裁判となり、一〇月一八日、太守島津義久は、家久を「粗忽」として寺家への蟄居を命じている（『覚兼日記』同日条）。

この争いがいつ沈静化したのかはつきりしないが、家久・忠長の手打ち＝関係修復の際、忠長の娘を長男豊久の妻に迎えた可能性がある。なお、二人の間に子供は誕生せず、関ヶ原の戦いで豊久が戦死した後、忠長娘は町田久幸に再嫁している。

（三）豊久の家督継承と所領安堵

第三章―（四）で述べたように、父家久は豊臣秀長に降服して間もない、天正一五年（一五八七）六月五日、四一歳の若さで急死した。当時から毒殺の噂があり、豊久や佐土原の家中には動揺が広がったとみられる。

家久が亡くなって五日後の六月一〇日、羽柴秀長は豊久に対し次のような書状を送っている^{③〇}。

誠中務不慮仕合、不及是非候、然共生死有習候之条、分別専用候、就其藤堂遣候、諸事談合可然候、其方覚悟次第、向後引立可申候間、可成其意候、於子細者委曲藤堂可申候、謹言、

六月十日

秀長（花押）

島津又七郎殿進之候

父家久の急死を「生死の習」として受け入れ、豊久に「分別」を求めている。家中の混乱・動揺を収めるためか、秀長は家臣藤堂高虎を佐土原に派遣したようであり、高虎と「諸事談合」するように

命じ、豊久の覚悟次第では引き立てると説得している。

こうした措置によるものか、豊久による家久旧領の継承が認められたようであり、翌天正一六年八月五日、豊臣秀吉は豊久に対し、「於日向国所々、知行方都合九百七拾九町」を宛行う旨の朱印状を与えている^{③〇}。これにより、豊久は島津本宗家からは独立した、豊臣大名となったのである。

文禄三年（一五九四）には、独自に領内の検地をおこなったようであり、「日向国都於郡境佐土原庄」の本知一万四、五七三石五斗に、検地による「出米」一万四、〇七二石五斗を加増分とし、合計二万八、六四六石を、秀吉から安堵されている^{③〇}。

なお、この直後に出されたとみられる、年欠一月二日付で豊久の留守居（豊久本人は朝鮮に出陣中）に宛てられた、秀吉朱印状は興味深い。

先年於豊州乱妨取之男女事、分領中尋校、有次第帰国之儀可申付候、於隱置者、可為越度候、并人之売買一切可相止候、先年雖被相定候、重而被仰出候也、

十一月二日（秀吉朱印）

島津又七郎留守居

「乱妨取」とは、戦場における人や物の略奪のことである^{③〇}。「先年於豊州」とは、天正一四・一五年（一五八六・八七）の家久による豊後進攻を意味している。この時、府内において島津氏の家臣とみられる「足軽や山野郎」が略奪行為を働いていたことは、島津側の記録である「長谷場越前日記」などにも見えるが、男女を略奪する行為もおこなわれたのである。それから、数年経つても、拉致された男女が佐土原領内にいることが、検地で発覚したのであろう。それを尋ねだし、すぐに豊後に帰国させるよう命じている。さらには、人身売買も禁じており、略奪してきた男女が奴隷として売買されていた実態もあったようである。

第五章 豊臣大名としての島津豊久―文禄・慶長の役から

関ヶ原の戦い―

(一) 文禄の役

豊臣大名となった豊久は、佐土原を安堵された天正一六年（一五八八）、母（樺山玄佐娘）とともに上方に登るよう命じられ、数年在京する⁽⁹⁰⁾。そして、「際限なき軍役」と呼ばれる、度重なる軍事動員にに応じて、国内外を転戦していった。豊臣大名となってからの豊久の人生は、戦いに明けくれる人生と聞いていいだろう。

天正一八年（一五九〇）二月からは、秀吉の小田原攻めに従軍し、九月によくやく帰国を認められている。しかし、天正二〇年（一五九二）正月、全国の諸大名に陣立てが発令され、朝鮮出兵（文禄の役）が始まった⁽⁹¹⁾。

豊久は、叔父島津義弘（大隅栗野城主）や伊東祐兵（日向飢肥城主）・秋月種長（同国高鍋城主）ら日向勢とともに、毛利吉成（豊前小倉城主）率いる第四軍に属し、騎兵三〇余騎・雑兵五〇〇余人を率いて出陣し、同年五月上旬ごろ首都漢城（現在のソウル）に入った。その後諸将は、朝鮮の八道を分担して経略することとなり、豊久の属する第四軍は、東岸の江原道の担当となった。忠豊は江原道の中心都市・春川の守備にあたり、朝鮮軍を迎え撃っている。この時豊久勢は、鉄砲百挺を打ちかけると、敵が浮き足立った隙に城門から五百余人で出陣し敵將以下五三〇余の首を討ち取ったという（『本藩』）。

同年六月、明は朝鮮救援のため遼東軍を派遣。翌文禄二年正月平壤が陥落し、日本軍は徐々に撤退を余儀なくされていた。そして、忠豊らも二月中に漢城（ソウル）近郊に撤退しているが、三月時点での忠豊の軍勢は二九三人と渡海時からほぼ半減していた⁽⁹²⁾。

この頃から、両軍による講和交渉が本格化し、日本軍は朝鮮半島南部の全羅道・慶尚道に撤退していった。講和交渉の最中、日本軍は交渉を優位に進めるとともに領土を確保するため、両道を結ぶ要衝・晋州城（もくそ城）の攻略をめざし、豊久も手勢四七六人を率いて参戦。六月二十九日、日本軍は晋州城を攻め落としており、この時豊久の馬験が入城一番乗りを果たしたと伝えられる（『本藩』）。

(二) 慶長の役

晋州城を落とした日本軍は、慶尚南道から全羅南道東部にかけての要所に「倭城」とよばれる城郭を築き、講和交渉の結果を待った。その間、島津義弘ら一部の武將は一時帰国したようであるが、林浪浦城在番を命じられた豊久の帰国は確認できない。

文禄五年（一五九六）九月、講和交渉は決裂。秀吉は朝鮮再派兵を決定し、慶長の役が始まる。翌慶長二年二月二日、秀吉は再派兵の陣立てを発表する。豊久は伊東祐兵ら日向国の諸大名とともに、黒田長政・毛利吉成率いる第三番に編成され、八〇〇人の出陣を命じられている⁽⁹³⁾。

全羅道（赤国）の制圧が目的となっていた。最初の戦いは、七月一日、朝鮮水軍を率いる元均が安骨浦・加徳島を襲った漆川梁の海戦（巨済島の海戦）であった。安骨浦守備にあたっていた家久は、「牛丸」・「小牛丸」と名付けられた船に鉄砲や熊手を載せて海戦に参加し、敵の大船に飛び乗ってこれを奪うなどの軍功をあげたと伝えられる（『本藩』）。勢いに乗った日本軍は同年八月一日、明軍の守る南原城を陥落させる。この戦いにも忠豊は参加し、敵首一三をとる軍功をあげ、その鼻を削いで日本に送っており、九月一三日に軍功を秀吉から賞されている⁽⁹⁴⁾。

しかし、日本軍は敗戦が続き、一二月末、明・朝鮮連合軍は加藤清正・浅野長政が守る蔚山城を包囲し、落城寸前となった。日本軍

は蔚山救援に向かい、豊久も、慶長三年正月元旦、明兵の守る蔚山北西の彦陽城攻撃に参加し、左耳下を負傷しながらも、単騎で先駆けして敵首二つを獲っている（『本藩』）。

慶長三年八月十八日、明軍の再攻撃が迫るなか、豊臣秀吉が没する。秀吉の死を伏せたまま日本軍の撤退と朝鮮との和議が模索され、豊久は、明・朝鮮軍の追撃を受け撤退の遅れた叔父島津義弘を待ち、義弘・忠恒父子を救出して十一月二三日釜山を出帆、博多に帰還した。豊久と佐土原衆の朝鮮在陣は約七年にも及んだ。

帰国後の慶長四年（一五九九）二月、豊久は朝鮮在陣中の軍功により、公家成して「侍従」となるとともに、父と同じ中務大輔に任じられている⁽²³⁾。既述のように、この時「豊久」と改名したようである。

(三) 庄内の乱と関ヶ原の戦い

島津勢帰国の翌月、慶長四年（一五九九）三月九日、島津本宗家を継承した島津義弘の二男忠恒（後の家久、一五七六～一六三八）は、家老伊集院忠棟（幸侃）を伏見（現在の京都府伏見区）邸の茶室に招き、斬殺した。忠棟の子忠真は、その所領である日向国庄内にある一二の外城に籠もり、抗戦の姿勢をとった。

豊久は、五大老のひとり徳川家康の指示により、国許に戻って島津義久と相談するよう命じられたとい（『本藩』）、同年三月二十九日、久しぶりに佐土原に戻っている。同年五月、島津忠恒が薩摩に下向し、翌六月、伊集院忠真討伐が開始された。いわゆる「庄内の乱」の開始である。

豊久は、緒戦の山田城（宮崎県都城市山田町）攻めから参戦しているが、同年八月二〇日、徳川家康から正式に出陣して伊集院忠真を「誅果」すよう命じられている⁽²⁴⁾。豊久は、豊臣大名として政権からの命令以前に軍事行動を起こしており、島津氏一門として、

島津義久・義弘の影響下・指示のもとで動いていたと考えられる。

慶長五年（一六〇〇）三月十五日、伊集院忠真が降服し、庄内の乱は終結した。しかし、豊久は、佐土原に二か月ほど滞在しただけで、同年五月一二日、伏見に向けて佐土原を発った。これが、妻との最期の別れとなったのである。

同年六月五日、豊久は徳川家康に帰国の暇乞いをし、大坂に下ったが（『本藩』）、七月二一日、石田三成らが挙兵し、関ヶ原の戦いへと巻き込まれてしまう。同月一九日、豊久は叔父義弘とともに西軍に属し、家康の家臣鳥居元忠の籠もる伏見城攻めに参加している（『本藩』）。

これ以降、九月一五日の関ヶ原での本戦に至る過程は、これまで多くの研究が指摘しており、本稿では省略する。また、関ヶ原における本戦については、従来の通説の基礎となっていた、参謀本部編『日本戦史 関原役（附表・附图）』（一八九三年）について、近年の研究で大幅な見直しが進んでいる⁽²⁵⁾。

豊久の最期は、通説では、西軍諸隊が敗走した午後になって、島津義弘・豊久が敵中突破を図った際、追撃する本多忠勝・井伊直政らに対し、豊久が一三騎を率いて突入し、戦死したとされる（享年三一）⁽²⁶⁾。その戦死の場所は、関ヶ原の南東に位置する烏頭坂（岐阜県大垣市上石津町牧田）とされ、大正九年（一九二〇）に顕彰碑も建立されている。

しかし、桐野作人氏は、諸史料の分析から、「関ヶ原宿口」で戦つばに大量の血の付いた豊久の乗馬が発見され、豊久の戦死を確信したとの後年の記録から、現在の関ヶ原町市街地付近で戦死したと推定している⁽²⁷⁾。

一方、美濃国石津郡多良郷（岐阜県大垣市上石津町）には、負傷した豊久がこの地までたどり着いて亡くなり、この地に葬られたとの伝承があり、同地の瑠璃光寺（るりこうじ）には豊久の位牌と墓

石が残されている。寛政年間（一七八九〜一八〇〇）、永吉島津家臣の岡野新次則衍によつて、この墓が「再発見」され、豊久の墓所と認定されたようである⁽¹⁾。

むすびにかえて―永吉島津家と本城家―

本稿では、戦国末から近世初頭の佐土原領主であつた島津家久・豊久父子について、その生涯の基本的事項を整理すると共に近年の研究により判明した事実を紹介した。最後に、二人の子孫のその後についてふれておきたい。

豊久没後の佐土原城は、島津義久の命を受けた豊久の叔父樺山忠助の支援を受け、豊久の弟忠直（忠仍）が守備していた（「本城」）。忠直は、初名を忠虎といい、薩摩国衆東郷重尚の養嗣子となつており、上井覚兼の娘を室とした。文禄二年（一五九三）に島津義弘の命により島津氏に戻り、重虎を忠直と改めたという⁽²⁾。しかし、慶長六年、豊久の旧領は徳川家康によつて収公され、忠直は母（樺山忠助妹）と姉（祢寝重張元室）を連れて佐土原城から退去している。

なお、「本城家譜」によると、退去前、忠直の姉（家久長女、大坂で人質となつていたが、義弘と共に帰国）は、上方から来た「光明仏」という男を豊久だと偽り、佐土原支配を維持しようと企んだようである。しかし、そのような嘘が通じるはずもなく、その咎により、忠直姉の所領五〇〇石は没収され、豊久と偽つた光明仏は鹿兒島南林寺の洲崎で処刑されたという（「本城」）。なぜこうした所業に及んだのかは明らかではないが、同家譜によると、文禄元年（一五九二）夏、朝鮮の陣中で忠直が「狂気病」となり帰朝したが、亡くなるまで「快気」しなかつたと記している。事実かどうか不明であるが、忠直では佐土原を維持できないとみての行動だったのか

もしれない。

佐土原を退去した忠直らは、所領であつた高岡田尻村（宮崎県東諸県郡国富町田尻）に八・九年居住した後、慶長一五年（一六一〇）もしくは同一六年、これも忠直領であつた大隅国菱刈本城に移つたという（「本城」）。

豊久の後嗣（跡目）は、忠直が命じられ、高六、八九七石余を拝領していた。しかし、忠直の男子に役に立つ者がいないという理由で、忠直長女（母は上井覚兼娘）に喜入忠統の長男忠栄（一五九七〜一六二四）を婿に迎えて継嗣した。忠栄没後は、藩主島津家久（忠恒）の九男久雄（一六二二〜一六六七）が、寛永二年（一六三四）六月に相続し、薩摩国永吉（鹿兒島県日置市吹上町永吉）を二所地として拝領した（『本藩』）。永吉島津家の成立であり、同家に相伝されたのが永吉島津家文書である。

一方、島津忠直は、慶長一九年（一六一四）に堪忍分一千石を与えられ、大隅国曾於郡三体堂村（鹿兒島県霧島市牧園町三体堂）に隠居し、元和七年（一六二二）五月二九日に没した（享年四八）。忠直三男忠頼（一六一四〜一六六三）の二男忠辰（一六五七〜一七二二）は、延宝九年（一六八一）正月、藩主島津光久に願ひ出て本城家を起こし、永吉島津家の庶流家となつたのである（「本城」）。現在、永吉島津・本城両家の相伝史料により、島津家久・豊久父子の事蹟を追うことができる。

(1) 初名は忠平、天正十三年（一五八五）十一月に備後国鞆の足利義昭から偏諱を拝領し、「義珍」となり、豊臣秀吉に降伏後から「義弘」となつたが、本書では便宜上「義弘」で統一する。

(2) 鹿兒島県立図書館蔵「御家譜」（『鹿兒島県史料集』VI）鹿兒島県立図書館、

一九六六年〕所収)。なお、『鹿児島県史料集』は、平成二十九年一月現在、全巻がPDF化され、鹿児島県立図書館ホームページにて公開されている。

(3) 尚古集成館編『島津家資料 島津氏正統系図』(島津家資料刊行会、一九八五年)。

(4) 『伊佐市郷土史誌史料集』一(伊佐市郷土史誌編さん委員会、二〇一五年) 所収。

本城氏は、家久の二男忠直の子孫。同氏相伝史料である本城家文書所収の「本城家由緒之覚」にも同じ記述がある。これは、延宝九年(一六八一)正月十九日、本城を家号として願いだした際、本城氏初代忠辰の兄相良源五左衛門頼安が、「本城家家譜」の原本から抜粋したものを、薩摩藩記録奉行河野通古に提出したものと(春山直人「本城家文書文書解説」『伊佐市郷土史誌史料集』一)。

(5) 拙著『島津貴久―戦国大名島津氏の誕生―』(戎光祥出版、二〇一七年)。

(6) 前注(5) 拙著。

(7) 『本藩人物誌』(『鹿児島県史料集』Ⅷ所収)。以下、このように略す。

(8) 廻城に至る坂の意か? 廻城は大隅国衙と都城を結ぶ街道沿いに位置しており、その坂道は亀割坂(かめわりざか)と呼ばれた。

(9) 「新編島津氏世録支流系図 樺山氏一流」(『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺 諸氏系譜一』所収)。

(10) 『鹿児島県史料 旧記雑録後編』(以下『旧記後』と略す) 一―三六六号。なお、この史料が、家久の初見史料でもある。

(11) 白井忠功「島津家久の旅―『中書家久公御上京日記』(『立正大学大学院紀要』一四、一九九八年)、同「京都の島津家久―『中書家久公御上京日記』―」(『立正大学文学部論叢』一〇八、一九九八年)。

(12) 東京大学史料編纂所蔵「新編島津氏世録正統系図」(『旧記雑録』に〇〇公譜の形で分割収録されている)。

(13) 前注(5) 拙著。

(14) 前注(5) 拙著。

(15) 前注(4) 『伊佐市郷土史誌史料集』一 所収「本城家家譜」末尾の系図。豊久の誕生日が他の系図類には記されていないが、本系図のみ六月一日と明記している。

(16) 波田興「戦国大名島津氏の軍事組織について」(福島金治編『戦国大名論集 一六 島津氏の研究』吉川弘文館、一九八三年、初出は一九五八年)、同「薩摩藩の外

城制に関する一考察―居地頭制下の地頭と衆中―」(宮本又次編『藩社会の研究』ミエルヴァ書房、一九六〇年)、福島金治「戦国大名島津氏の家臣団編成」(同『戦国大名島津氏の領国形成』吉川弘文館、一九八八年)。

(17) 一尺は三〇cmで、一〇〇cmもある長い太刀であった。近世の刀の標準サイズは、二尺三寸―約七〇cmである。

(18) 拙著『島津四兄弟の九州統一戦』(星海社新書、二〇一七年)。

(19) 『大日本古記録 上井覚兼日記』(以下、『覚兼日記』と略す) 同日条。以下、本節の記述はこの日記に拠る。

(20) 村井祐樹「東京大学史料編纂所蔵『中務大輔家久公御上京日記』」(『東京大学史料編纂所研究紀要』一六、二〇〇六年)に、原本とみられるものが全文翻刻されている。

(21) 桐野作人「知られざる猛将 島津家久」(同『さつま人誌 戦国・近世編』南日本新聞社、二〇一一年)。

(22) 前注(12) 白井論文。

(23) 本多博之『天下統一とシルバ―ラッシュ―銀と戦国の流通革命―』(吉川弘文館、二〇一五年)。

(24) 大友側の動きは、『大分県史 中世編Ⅲ』(大分県、一九八七年)による。

(25) 渡辺澄夫「大友宗麟とキリスト教的理想国」(同著『増訂豊後大友氏の研究』第一法規出版、一九八二年)。

(26) 前注(18) 拙著。

(27) 『大日本古記録 上井覚兼日記』解題・年表。

(28) 『大分県史 中世編Ⅲ』(大分県、一九八七年)。

(29) 堀本一繁「龍造寺氏の戦国大名化と大友氏肥前支配の消長」(『日本歴史』五九八号、一九九八年)。

(30) 『新熊本市史 通史編 第二卷 中世』(熊本市、一九九八年)。

(31) 前注(18) 拙著。

流系図家久一流」、『本藩人物誌』に拠る。

(69) 前注(68) 中野等著書一〇六頁。

(70) 「永吉島津家文書」五九号。

(71) 「永吉島津家文書」八〇号。

(72) 前掲「新編島津氏世録支流系図家久一流」。

(73) 「永吉島津家文書」八二号。

(74) たとえば、白峰句『新解積関ヶ原合戦の真実―脚色された天下分け目の戦い―』(宮帯出版社、二〇一四年)。

(75) 『日本戦史 関原役(附表・附図)』(一八九三年)、前掲『本藩人物誌』。

(76) 桐野作人『関ヶ原 島津退き口―敵中突破三〇〇里―』(学研新書、二〇一〇年)、同「島津豊久の最期と埋葬地」(同『さつま人誌 戦国・近世編3』南日本新聞社、二〇一七年)。

(77) 「御墓所相立候由緒書」(前掲「永吉島津家文書」一四五号)。

(78) 前掲「新編島津氏世録支流系図家久一流」。